

■令和7年度
安全性向上を担うリスク・コミュニケーター育成事業

福島事故の実例から： 市民との対話の場の ファシリテーターの経験

崎田裕子 ジャーナリスト・環境カウンセラー



環境省資料より



崎田裕子

ジャーナリスト・環境カウンセラー



公設環境学習施設の
市民・事業者参画型運営を推進
(NPO法人新宿環境活動ネット代表理事)

- 環境・エネルギー軸に持続可能な地域づくりに取り組む
- 経済産業省・資源エネルギー庁「総合資源エネルギー調査会」委員～2022
「放射性廃棄物ワーキング」委員～2022
- 環境省「中央環境審議会」、「循環型社会部会」等委員～2024
「放射線リスクミセンター」総括補佐 2022～
- 早稲田大学 招聘研究員、内閣府「地域活性化伝道師」登録

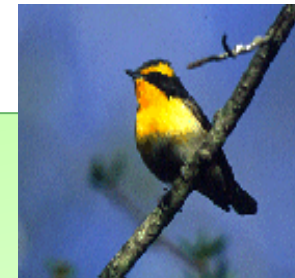
高レベル放射性廃棄物リスクミとの関り

- 2007～2017 理事長を務めた「NPO法人持続可能な社会をつくる
元気ネット」で高レベル放射性廃棄物・地域WSに取り組む

福島環境回復・復興・放射線リスクミとの関わり

- 2011～2018 「環境回復勉強会」の自主開催
- 2011～環境省「環境回復検討会」委員
- 2012～環境省・福島県「除染情報・環境再生プラザ」運営委員
- 2014～環境省「放射線リスクミセンター」運営委員
- 2015～2018 環境省「放射性物質汚染対処特措法」委員
- 2016～2020 経済産業省「ALPS処理水小委」委員
- 2019～早稲田大学「1F廃炉の先研究会」副代表として対話の場づくり
- 2023～環境省「中間貯蔵地域ワーキンググループ」委員

<目次> 福島事故の実例から:



福島県のシンボル、ケヤキ・キビタキ・ネモトシャクナゲ(県HP)

市民との対話の場のファシリテーターの経験

■Part-1 2011年の経験

3月11日19:00 原子力緊急事態宣言

■Part-2 2012年からの経験

避難の後、中通りから広げるコミュニケーション

■Part-3 2014年からの経験

避難指示解除と共に、浜通りでのコミュニケーション

Part- 1

2011年の経験

3月11日19:00
原子力緊急
事態宣言

1Fから3km
圏内避難指示



■着のみ着のまま 写真は福島県HPより/文章との関連はありません
「“避難バスには何も持たずに乗って”との指示に従い、財布を入れた小さなバッグすら家に残し、何も持たずに避難バスに乗りました。飲み物一つ買えない。なんにもなかった。」

2011年3月12日

1 Fから10km
圏内避難指示

2 Fから3km
圏内も避難



■3月11日は娘の中学の卒業式

福島県HPより

「娘が学校から帰ったら、家族で旅行に出ようと準備してました。現金も多めに銀行から下ろし、着替えを詰めたバッグも準備してました。」

家族一緒に荷物も持って自動車で避難しましたが、バスがどの避難所に行ったか探すのが大変でした」

2011年夏

福島県中通り。
大ホールで
「専門家と市民
の対話」
ファシリテーター

■放射線の専門家と多くの市民の対話

「浜通りから避難して、中通りで生活しています。スーパーで売っている福島産の食材は検査済みで安全、といっても、やはり不安」

「テレビでは、専門家という人たちが違うことを言っていて、何が正しいかわからない」

「事故が起きた怖さや怒りを SNSでどんどん拡散させたけど、気付いたら福島への差別や風評被害が高まって、怖くなった。すぐに拡散はやめたけど、もう収まらなかった」

「夏になっても孫に“遊びにおいで”と言えないのが悲しい。いつになったら大丈夫なのか」

「裏山の山菜を取って食べるのが楽しみなのに」

2011年夏

東京での
「グループ
対話」
ファシリテーター

■自分の住む町の放射線量が心配

「TVでは東京の線量は基準以内と言ってるけれど本当に大丈夫か。公表データは正確なのか」

「友人たちと線量計を購入して、毎朝自宅前の線量を測って情報交換しました。しばらく続けニュースの数値に納得して、計測はやめました」

■赤ちゃんを育てるのは、東京でもいや

「生後半年の子育ては心配と、友人の奥さんが四国の実家に避難。数か月で戻ったけれど、福島から少しでも遠くにと横浜に引越しました」

2011年秋

千葉県〇市
小学校体育館
「市長と市民
の対話」
ファシリテーター

■ホットスポットとして騒がれた〇市役所と住民の初めての対話集会。小学校体育館に集まった市民約300人と4時間半。翌日も5時間。

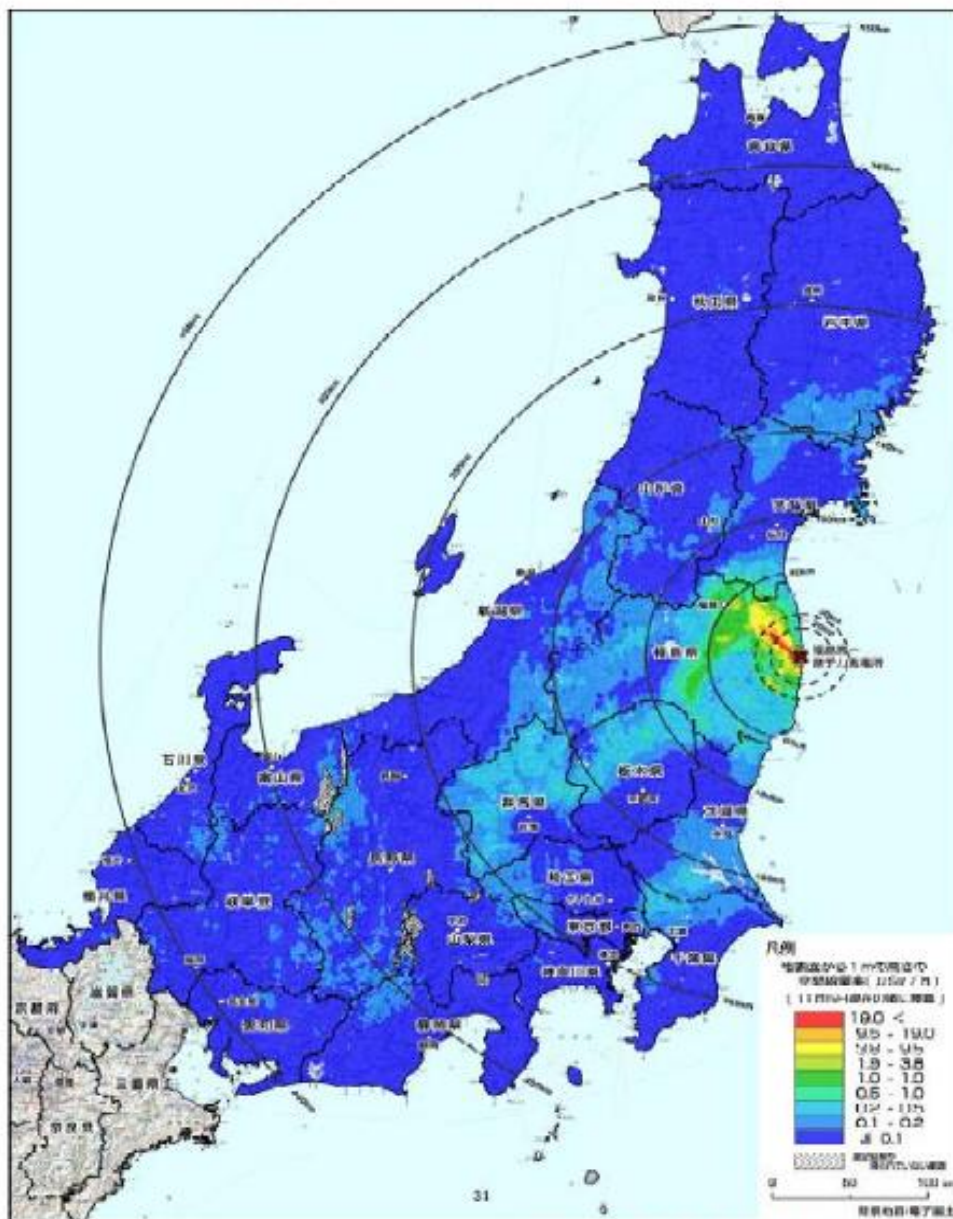
「福島県外なのになぜ線量が高いのか？」

「普通に暮らしていて大丈夫なのか？」

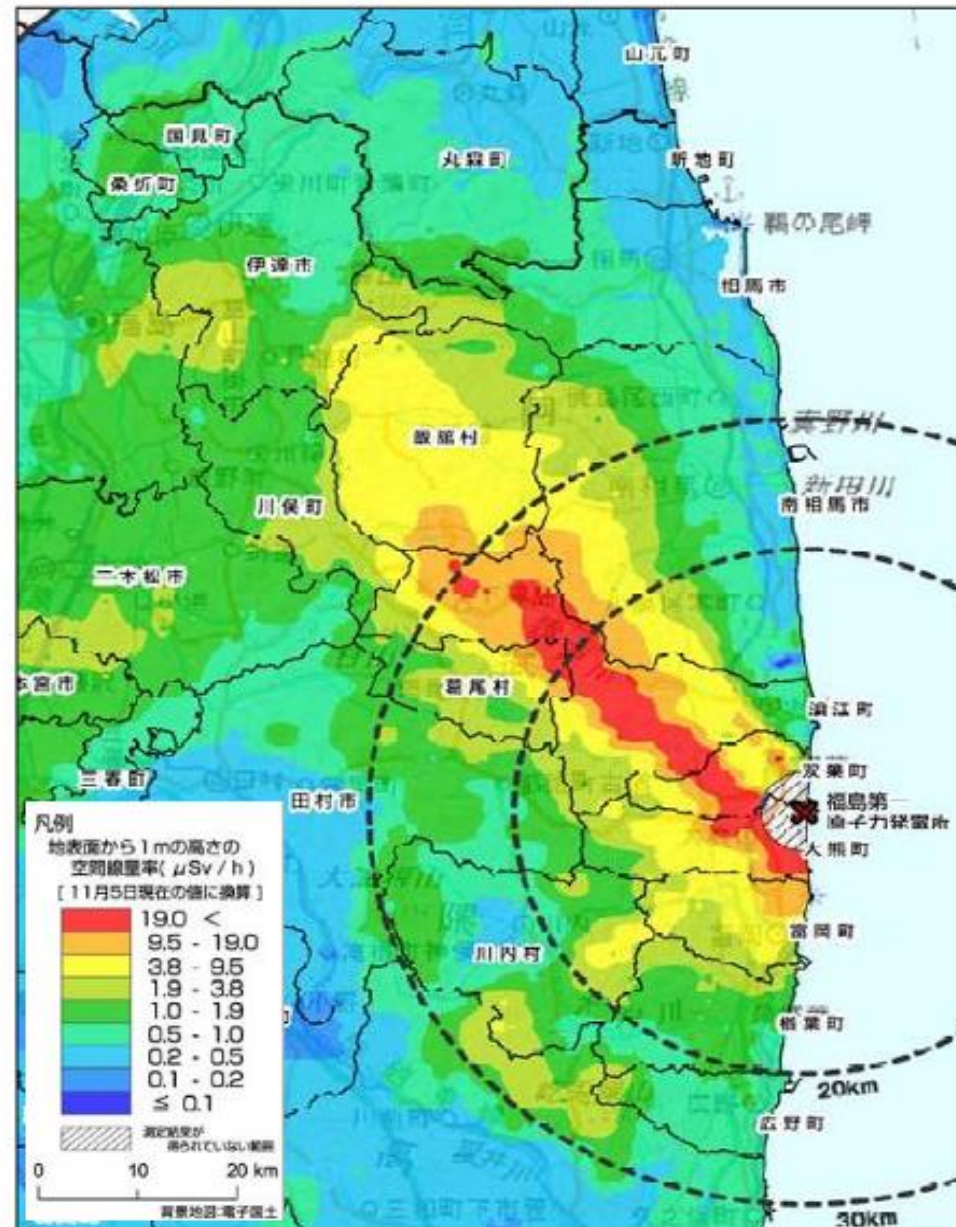
「市はどうしてくれるのか？」に始まり最後は

「子供の小学校の通学路だけでも、親たちで除染しよう！ どうやったらいいのか、市役所は助けて欲しい」で終わるまで9時間半。

翌日の新聞1ページに詳細な内容が掲載された。



※本マップには天然核種による空間線量率が含まれています。



環境省資料より

文部科学省による第4次航空機モニタリング(平成23年10月~11月)の結果

経験から
見えてきたのは
信頼できる情報
×
対話の場

- 正確な情報源はどこか。
市民に納得感のある情報源はどこか。
普段からの取組が必要
- 専門家の話を聞くだけではない。
質疑応答やじっくりした対話で
自分なりの物差しを持てる場が必要
- 定期的な対話の場を作り、
分野の違う専門家を招聘するのもいい。

対話の進め方

すべての人
を尊重

×

公平な場に

- 場の主旨を共有する
- 対話を進める自分の役割を明確に伝える
- 専門家も紹介の後は「さん」づけで
- 参加者も一人30秒～1分以内に簡単自己紹介
(大規模対話の場合は省略)
その後の発言は一度に2分以内に
- 参加者同士が、不安や思いを率直に話し、
自分と違う意見にも真摯に耳を傾ける場に。
- ただし不規則発言、長い発言、他者を尊重しない発言には、毅然とした態度で進行する

対話で 目指すのは？

- 多くの人と思いを共有することで、
一人ではないと気付いて欲しい
- 不安を克服するきっかけを見つけて欲しい
- 怒りや悲しみから、前向きになって欲しい
- 再出発にはどのような選択肢があるか、
考えるきっかけにして欲しい



PART-2 2012年からの経験

避難の後、中通りから広げるコミュニケーション

「安全神話崩壊」 放射線リスクを伝えてこなかった「事業者や専門家・国への不信」
「抑えられない 怒り・悲しみ」 不安・不満は瞬時に拡散



けれど福島への風評被害の高まりに市民自身も「困惑」



「信頼」の再構築に向けて
除染・環境回復から復興にむけた生活再建、地域再生へ

福島県のシンボル、ケヤキ・キビタキ・ネモトシャクナゲ(県HP)



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

福島県・環境省が福島駅近くに開設

2012.1

除染や放射線の情報拠点「除染情報プラザ」

※運営委員会委員として現在まで関わっている。

人をつなぎ①情報提供 ②対話の場へ専門家派遣 ③地域とコミュニケーション

①除染や放射線に関する情報の提供

タッチパネル、大型モニター、映像や模型でわかりやすく。来館者の疑問をスタッフに相談。



②専門家派遣移動展示

専門家を市町村や町会、学校などへ派遣。移動展示や学校での出張セミナーも。



③地域とのコミュニケーション

除染や放射線に関して、地域の方々と学び考えるセミナーやワークショップ実施、除染や復興に向けた活動を紹介する展示。
気軽に利用できるスペースやコミュニケーションの場も



資料「除染情報プラザ」
<http://josen-plaza.env.go.jp/>



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

2013

地域コミュニケーションの進展 まず中通りで情報交換の場づくり

除染・モニタリング活動や放射線不安低減など、
福島再生に取り組む方々の 情報交換・経験共有の場づくり。



地域活動としての放射線対策、線量低減活動の高まり



- ・第1、2回は主に線量測定や線量低減化等に取り組む方々からの事例紹介。
- ・第3回は農地の測定などに取り組む専門家や避難者支援団体の方などと情報共有。

資料「除染情報プラザ」 <http://josen-plaza.env.go.jp/>



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

地域コミュニケーションの進展 中通りから浜通り地域で情報交換の場づくり

2014

県外から戻った方々の意見ふまえ、中通りの放射線不安対策

第1回ポジティブカフェ



個人線量の測定体験 勉強会



食に関するワークショップ



放射線を学ぶ行事や、地元食材の陰膳調査、個人線量の測定体験会など。

2015

浜通りを中心とした地域との連携、情報共有へ



いわき、南相馬、楢葉など、浜通りで「カフェ」を開催。地域の方々が抱える放射線とのくらしの不安低減と、福島再生への思いを共に考える。



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

地域コミュニケーションの進展

「くるまざカフェ」ふくしま“みち”さがし

2016

企画委員会ふまえ、ワークショップで体験プログラムづくり



放射線不安と向合い
日常を取り戻すため、
地域の多様な取組み
情報を共有して、
体験型企画づくり

ふくしま“みち”さがし 体験プログラム



「食の安全対策
とふくしまの
美味しいもの
さがし」

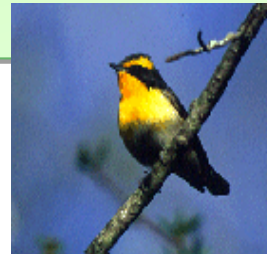


「浜通りと
あぶくまの
森林里山の今」

2017.7より
「環境再生
プラザ」と
名称変更し
福島市内を
拠点に福島
全域で運営

PART-3 2014年からの経験

避難指示解除と共に、浜通りでのコミュニケーション



福島県HPより

浜通りの放射線不安に寄り添う相談員・自治体を支援 放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

2014



2013原子力規制委員会
の提言を基に、2014年設立



内閣府が制度化。
環境省が支援センターを
いわきに設置。崎田は
運営委員として関与。

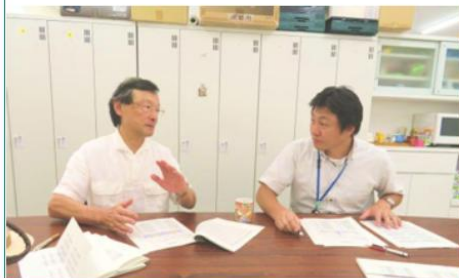
避難指示12市町村で、住民の方々の放射線不安対応を行う相談員
や研究者、生活支援相談員、自治体職員、保健師の方々等を対象に
放射線相談の支援、測定へ専門家派遣、放射線の研修会等を支援。

図・資料は相談員支援センターHPより

自治体・相談員・教員等の放射線リスクコミ支援から 2022年、地域住民の方々の直接支援にも拡大

2014

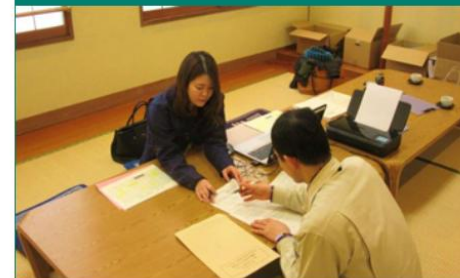
住民からの相談対応支援



専門家等の派遣



相談員等の実働支援



広報資料の作成支援



研修会等の開催



放射線教育支援

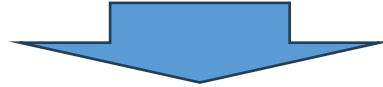


2022



(事例)いわきの高校生の「中間貯蔵施設見学と 道の駅会議室での車座意見交換会」2023.7

- ・科学部生徒20人。教師から支援相談を受け、バス見学会と専門家派遣。
- ・ワークショップ開催。ファシリテーターは担当教諭。グループFTは福島大生3人。
- ・専門家は、施設用地交渉を行った時期の環境省幹部。



- ・グループワークで、午前の「見学での発見と疑問」を共有。
(高校生)「土壌貯蔵施設の線量測定で、土の上を歩けたのは驚き。」
「再生土壌で花が育つとは驚き。」→情報が外に出ていない。



- (大学生)「除染や中間貯蔵事業を開始したのは今の大人世代だが、
最後に解決するのは僕たちの世代。関心を持ってゆきたい。」
- (先生)「高校生は、震災と放射線災害の語り部の最後の世代。
長泥の土壌利用や1F見学で探求学習につなぎ、「自分事」にして欲しい。」

放射線リスクセンターの取組

放射線の健康影響や遺伝影響への誤解がまだまだ多い。
表に出さない「かくれ不安」の方も多い現状。
自治体や相談員、学校教育の支援。
地域活動リーダーの方の支援など通じ、
被災された方や移住の方などを応援。

適切な情報

じっくり対話
機会の提供

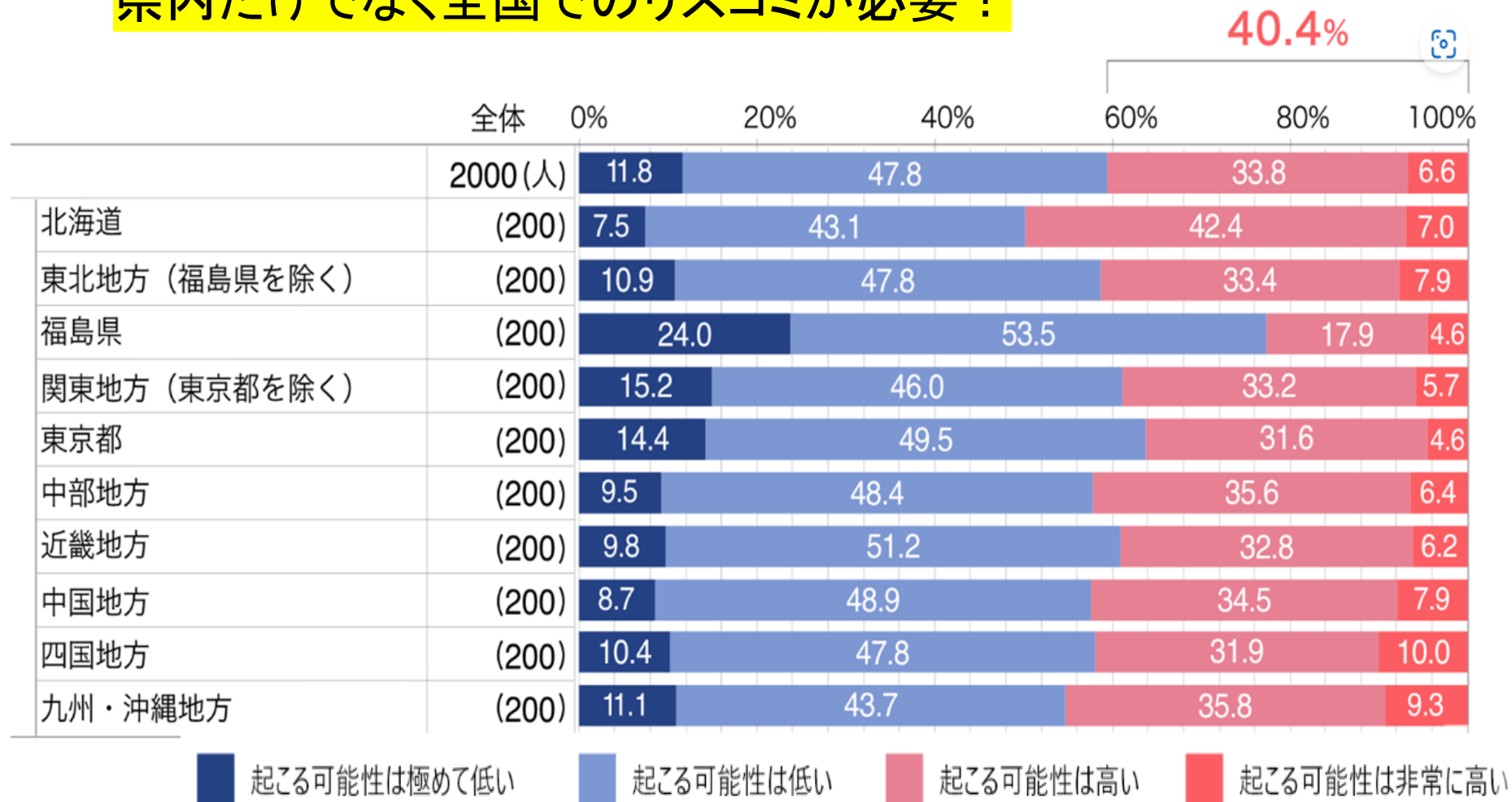
ひとり一人が
考え、行動に
活かして欲しい

2022.3環境省調査 放射線健康影響のリスク認知

【福島県に居住する人は「遺伝性影響の可能性は高い」】

と回答した人は全国で40.4%、福島県内は22.5%

県内だけでなく全国でのリスク認知が必要！



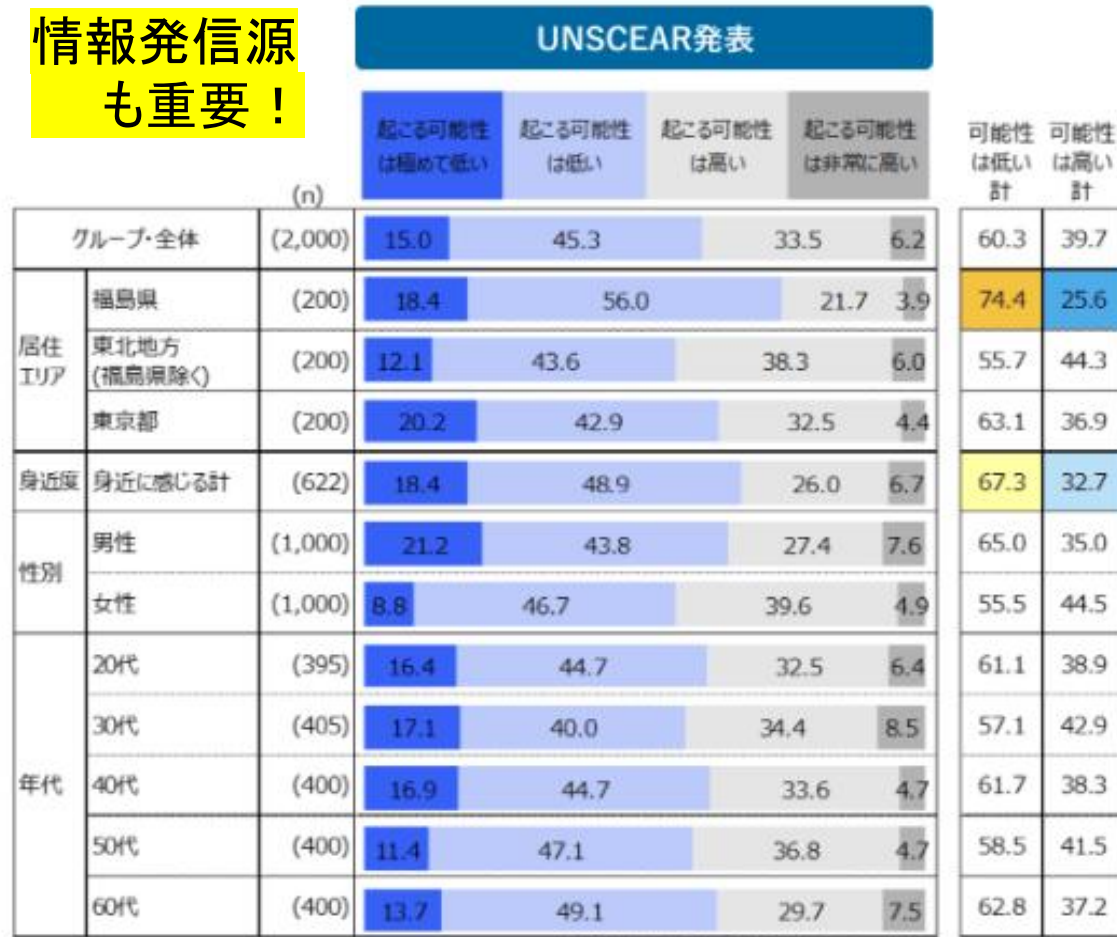
放射線健康影響のリスク認知に係るWEBアンケート調査結果 (2022年3月環境省実施)

2023.3環境省調査 放射線健康影響のリスク認知

「国連科学委員会UNSCEARは“将来的な健康影響は見られそうにない”と発表した。」
と情報提供しても、影響の可能性は高いと答えた人は全国で39.7%。

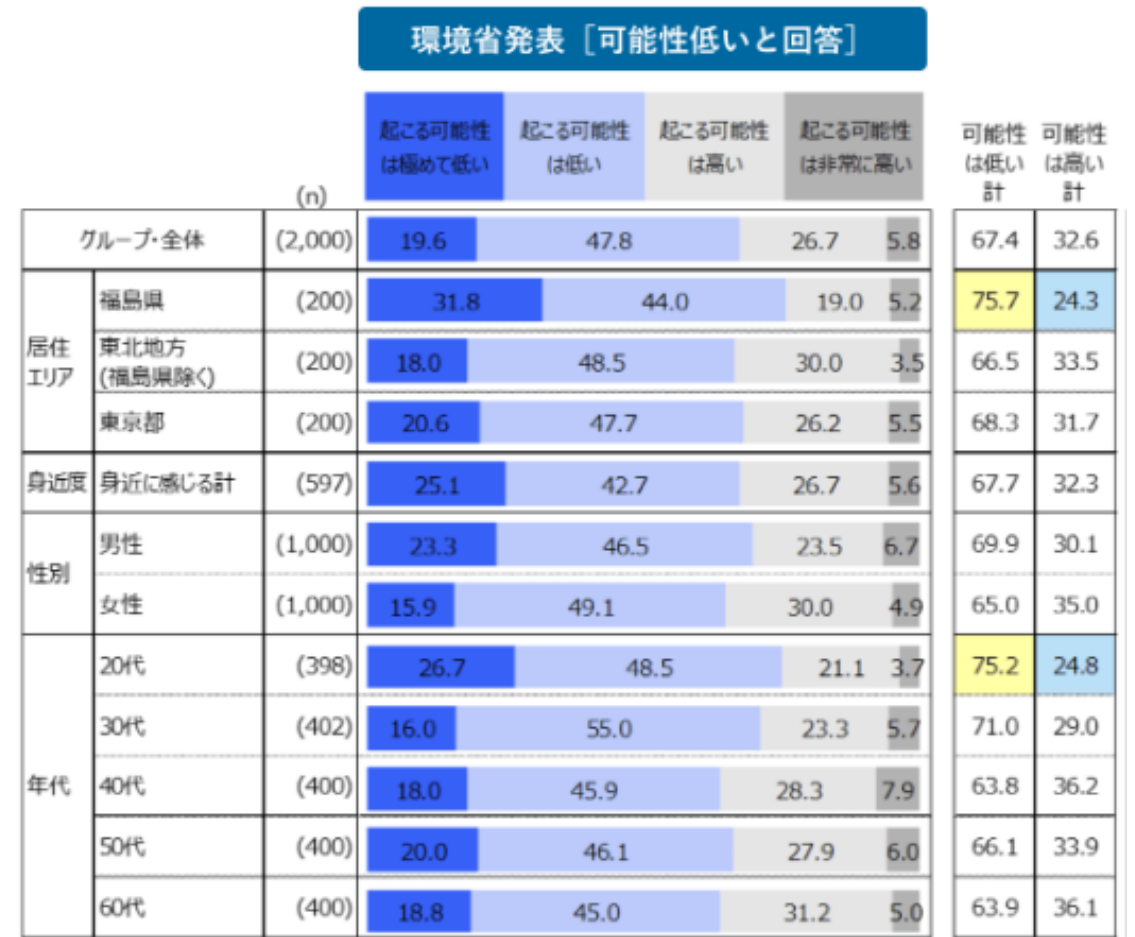
「福島知人が健康影響は低いと思っている」と聞いた人で、高いと答えたのは32.6%。

情報発信源
も重要！



※ 2%未満のグラフスコアは非表示 (%)

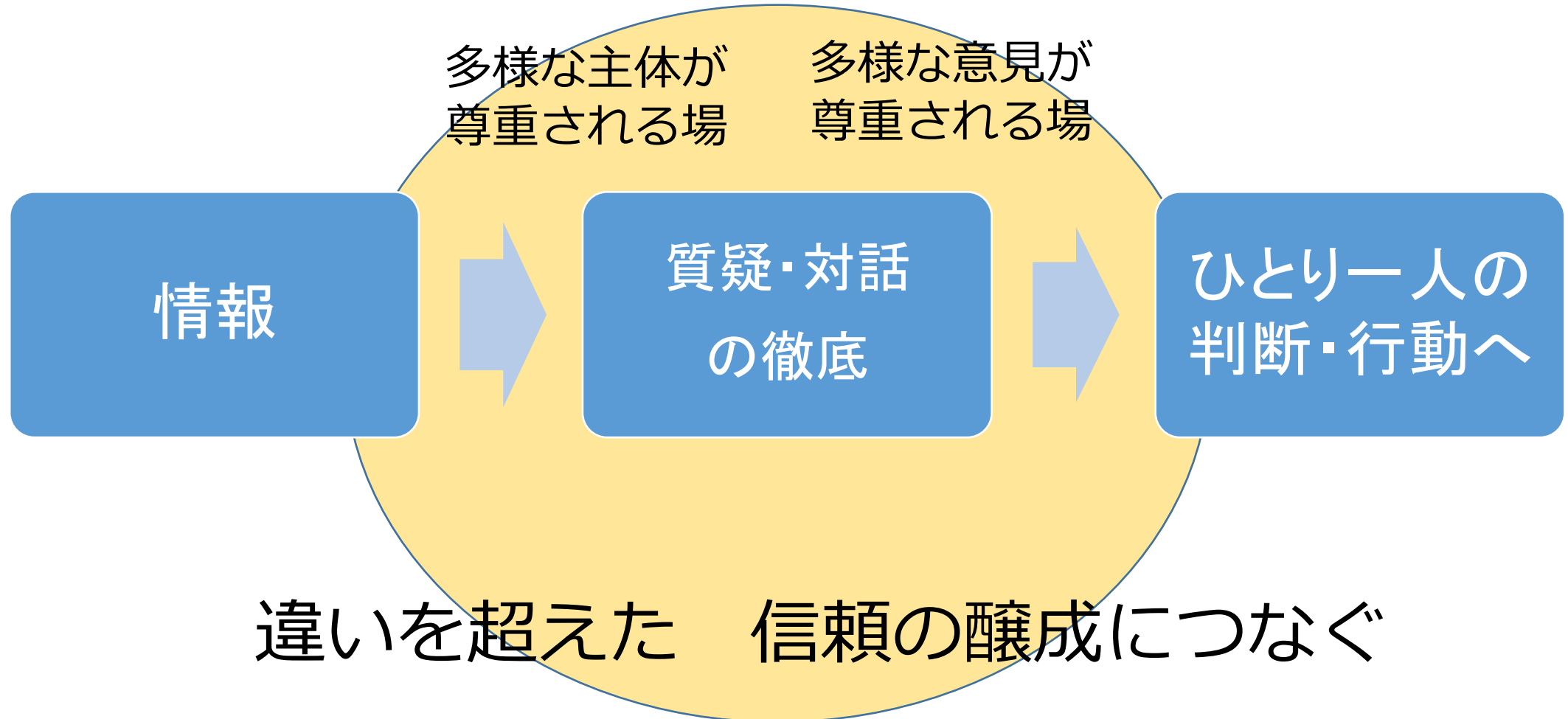
2025 YU



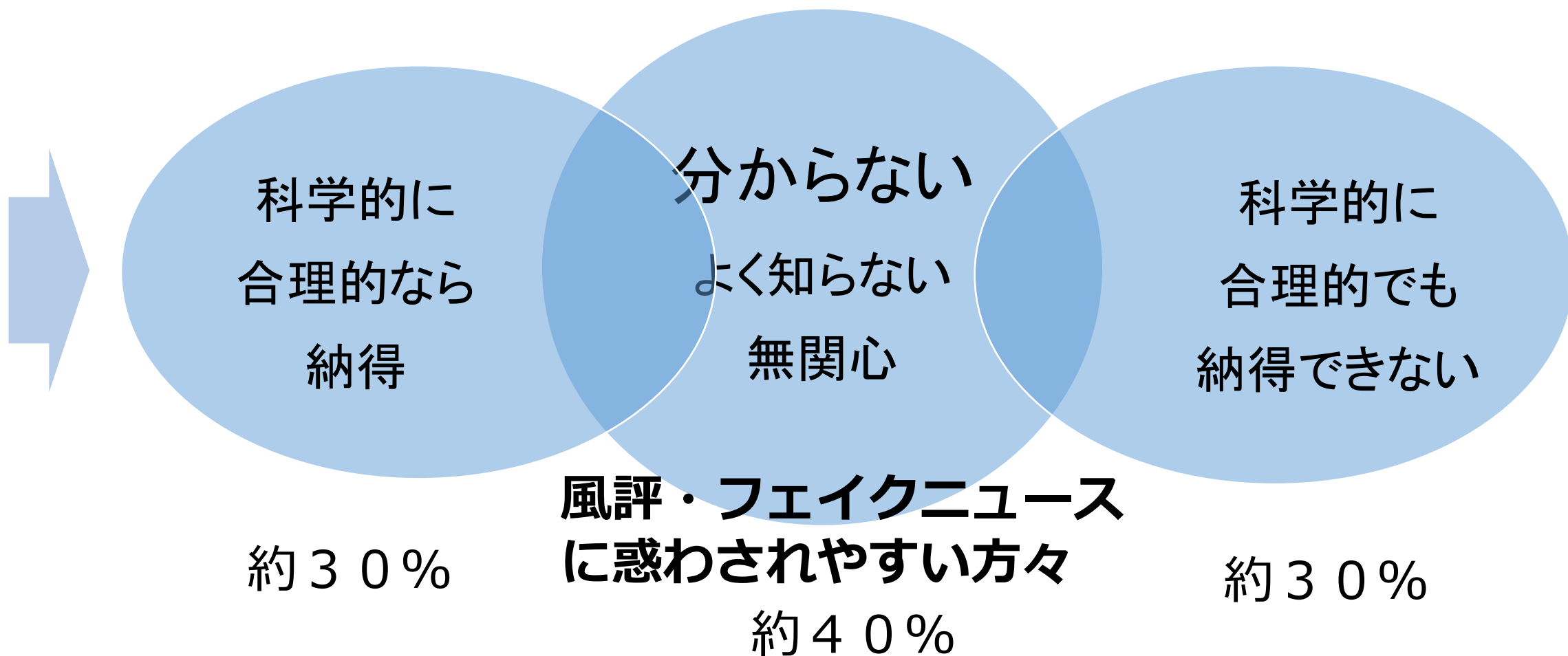
※ 2%未満のグラフスコアは非表示 (%)

可能性は低い計は「起こる可能性は極めて低い」+「起こる可能性は低い」

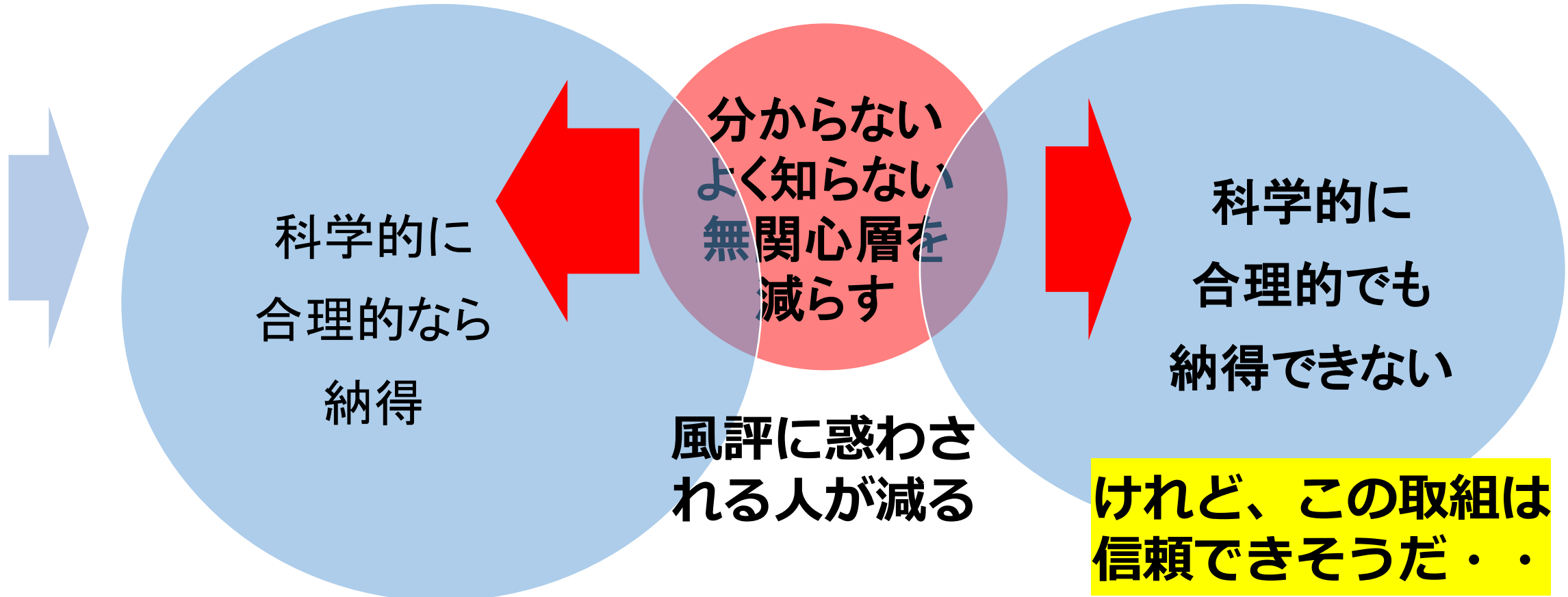
<参考>「対話の場」に期待するのは何か



そして、リスコミで期待するのは？



結果としてめざす状況は？

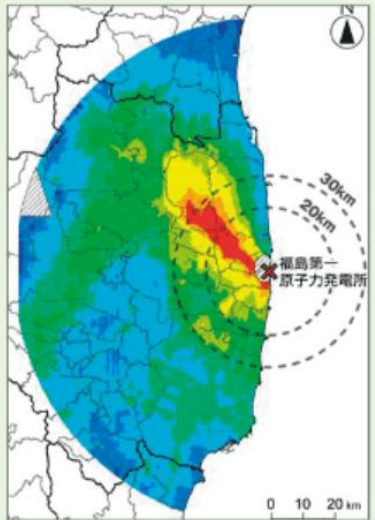


80km圏内の空間線量率の推移 原子力規制庁データを基にした環境省HPより

2011年

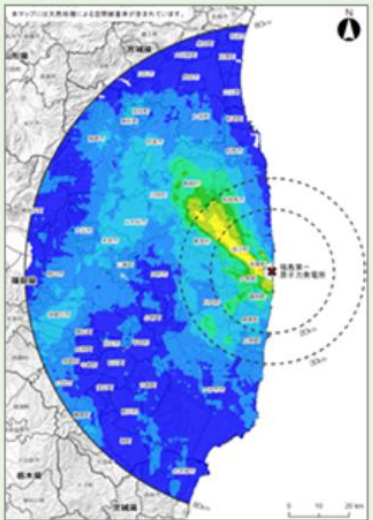
東京電力福島第一
原子力発電所を中心に、
空間線量率の高い
エリアが見られる。

空間線量率とは？
ある空間における放射線の量を空間線量と
いい、これが1時間あたりどれくらい出ている
のかを示したものが空間線量率です。



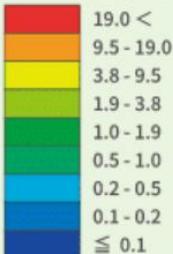
2021年

全体的に
空間線量率が
大幅に
下降している
傾向が見られる。



凡例

地表面から1 m の高さの
空間線量率 (μSv/h)



測定結果が
得られていない範囲

※本マップには天然核種による空
間線量率が含まれています。
※事故1ヶ月後のマップは現在と異
なる手法によりマッピングされた

福島県HPより



中間貯蔵施設用地内から林の向こうの福島第1原子力発電所とタンク群を望む
2024.2.3撮影

